

# 琉球大学学術リポジトリ

[書評] 上原兼善(UEHARA Kenzen)著『島津氏の琉球侵略：もう一つの慶長の役』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊見山, 和行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/33987">http://hdl.handle.net/20.500.12000/33987</a>

## [書評]

### 上原 兼善 (UEHARA Kenzen) 著 『島津氏の琉球侵略——もう一つの慶長の役——』

榕樹書林 (沖縄) 2009年4月 274頁

豊見山 和行 (TOMIYAMA Kazuyuki)

#### 1. 本書の刊行背景

2009年は、奄美と沖縄にとって400年前の戦争を直接の契機として、その後の歴史をさまざまな角度から振り返る1年となった。1609年とは、奄美諸島と沖縄島へ侵攻してきた薩摩藩島津軍との交戦の年であり、島津軍に敗退した琉球国は、それ以後、薩摩藩の支配下に置かれた。また、2009年は1879年の明治政府による「琉球処分」(廃琉置県=琉球国の解体)から270年目に当たっていたことから、この2つ歴史的事件を併せて問い直す動きも活発であった。地元紙の「沖縄タイムス」では正月早々から大型特集として「御取合400年——琉球・沖縄歴史再考——」を1年間(週1回)にわたって連載した。同様に「琉球新報」は「南海日日新聞」(本社、奄美大島)との合同で「薩摩侵攻400年——未来への羅針盤——」を企画・連載(正月~10月)した。その後、琉球新報紙は単独で「〈琉球処分〉を問う」を10月~2010年3月まで紙面展開した。

新聞での特集・連載の紙面だけでなく、島津氏の琉球侵攻に関係した講演会や講座・シンポジウム・イベントも目白押しであった。開催数は2009年正月早々から翌10年2月まで実に約45回を数え(月平均3回)、沖縄・奄美はもちろん鹿児島・大阪・東京・仙台の各地だけでなく、海外では韓国(ソウル、1回)と中国(北京、1回)でも開催された。歴史研究者に限らず、奄美・沖縄では一般市民の関心も高く、住民運動の視点からシンポジウムを主催する団体も登場するなど、琉球侵略400年・琉球処分130年一色の1年間といってよいほどであった。およそ50年前の1959年前後(さらに100年前の1909年前後)に琉球侵略350年(同じく侵略300年)を問題とするような社会的状況は管見の限りでは確認できない。つまり琉球侵略400年問題とは、すぐれて今日的な社会的事象として奄美・沖縄住民によって新たに捉え直された、というよりむしろ捉え直しを必要とされた歴史的事件であったと言えよう。

さて、上記の各種講演会・講座等において多様な視点や論点が提起され、琉球侵略400年・琉球処分130年をめぐる議論は一定程度の深まりを見せた。しかし、その一方旧来の見解を焼き直しただけの歴史像も繰り返されるなど、玉石混交でもあった。

そのような中で、本書『島津氏の琉球侵略』が4月に刊行され、それに関連した「シンポジウム〈薩摩の琉球侵略400年を考える〉」も開催された(5月9日、那覇市)。シンポジウムそれ自体、ひとつのエポックとなる有意義なものであったが、ここでは本書に限定して、その意義といくつかの問題点を取り上げることにしたい。

本書は、琉球侵略400年の節目に合わせて刊行されたものだが、時流に便乗した興味本位の一般書ではない。島津氏の琉球侵攻・侵略を主題とする個別論文は豊富とは言えないまでも、これまでにいくつかの優れた論考が発表されてきたが、本書はこの主題に焦点を絞り、全体的かつ詳細に検討を加えた学術書としては初めてのものである。待望の書と言えよう。

## 2. 全体の構成

本書は、次のような構成となっている。

はじめに

### 第一章 豊臣の「平和」と島津氏・尚氏

第一節 緊張のたかまり / 第二節 琉球渡海船の統制強化 / 第三節 豊臣政権の九州制圧 / 第四節 尚寧と豊臣政権 / 第五節 朝鮮侵略と琉球 / 第六節 尚寧の冊封問題 / 第七節 拿捕される琉球人たち

### 第二章 徳川「武威」外交と琉球

第一節 徳川家康の貿易統制と島津氏 / 第二節 島津氏の対明交渉 / 第三節 尚寧政権下の政情 / 第四節 奥州・平戸・甌島漂着船問題 / 第五節 盛り上がりぬ出兵談義 / 第六節 冊封使夏子陽と琉球の防備 / 第七節 延びる出兵

### 第三章 島津軍の南島における軍事的展開

第一節 出兵の挙行 / 第二節 奄美諸島における戦闘 / 第三節 今帰仁攻略 / 第四節 首里・那覇をめぐる攻防 / 第五節 虜囚の尚寧

### 第四章 異国の王の聘問

第一節 謝名親方の動向 / 第二節 検地 / 第三節 明国派兵構想の浮上 / 第四節 大御所聘問 / 第五節 將軍聘問 / 第六節 辺里・粟散・境の王なれども

### 第五章 境界の領域として

第一節 掟と起請 / 第二節 奄美諸島の直轄化 / 第三節 琉明関係の変化

おわりに／あとがき／索引

「はじめに」において、1609年の歴史的事象について主に戦後の研究史を振り返ることで、主要な論点を簡潔にまとめている。また、本書は1570年代前後から起筆しているが、その理由は、琉球や島津氏などの政治の実権者の交代だけでなく、特にこの時期を境に前代とは異なる政治的關係が新たな展開を遂げたことに求めている。「島津氏による琉球占領を、より広く日本の社会変動、東アジア世界の政治変動の中に位置づけて捉えかえてみたい。」という点に本書の問題視角が明示されている。

第一章「豊臣の〈平和〉と島津氏・尚氏」においては、主に琉球・島津氏間の矛盾・対立が顕著となった、1575年に鹿児島へ派遣された綾船問題を取り上げる。この問題の背景には、琉球渡海朱印状の発給を通して船舶の管理強化を図ろうとする島津氏に対して、琉球を主体として「より多くの商船の招致」を維持しようとする琉球との間の貿易権をめぐる角逐が激化したことにあった。

また、当該期の中央政権＝豊臣政権は、島津氏を介して明国との勘合貿易の再開を模索していたが、その政治的圧力は琉球へも及び、琉球の意志とは無関係に豊臣政権の「唐入り」（朝鮮侵略戦争）の動員体制に組み込まれていった。しかし、琉球側は豊臣政権へ完全に併呑されることを回避するための政治交渉を行い、豊臣政権とは一定の距離を保っていた。

第二章「徳川〈武威〉外交と琉球」では、新たな覇者となった徳川政権による対外政策の中で島津氏および琉球との関係が検討されている。徳川政権は島津氏・琉球を介して対明交渉を働きかけたが、その外交方針は和平的な一面とともに、幕府の要求を通すためには、明国へ軍勢の派遣を示唆する恫喝的な「武威」外交を基本としていた。後の島津氏による琉球侵攻が実行されたことから、当該期の武家外交における共通点を持っていた。島津氏権力は琉球への軍事侵攻の積極派と消極派に二分されていたが、財政的危機の打開策として琉球領の「大島入り」へと傾斜して

いった。

大島への派兵については、徳川政権が何時の時点で島津氏に許可を与えていたかという問題がある。旧来、その点を明示する幕府側史料は見あたらないため不明確であったが、本書では1606年(旧暦、以下同)11月頃と関係史料から推定している。ただし、徳川政権は、琉球からの使節派遣の実現を一方では島津氏へ求めていたことや、対朝鮮外交の修復などが絡まり、即座に派兵は実行されなかった。

第三章「島津軍の南島における軍事的展開」では、出兵体制を整える島津氏の動向と徳川政権の関係、および琉球での戦闘状況について検討が加えられている。派兵前年の1608年12月段階においても徳川政権は、「琉球への軍事行動には慎重」であったが、琉球からの使者派遣はついに見られず、結局1609年3月4日に軍船が派遣された。「奄美諸島での戦闘」や「今帰仁攻略」、そして「首里・那覇をめぐる攻防」について、「喜安日記」「琉球入ノ記」「南聘紀考」「旧記雑録」等々の関係史料をもとに詳細に叙述されている。その中で、鋪那(識名)原での戦闘が存在したことなどを新たに見いだしている。

第四章「異国の王の聘問」では、敗者となった尚寧王一行は鹿児島へと連行され、駿府では大御所の家康に、江戸では二代将軍の秀忠に謁見したプロセスを中心に叙述されている。また、この時期、外交面において緊迫した謝名親方による明国への密書問題、そして徳川政権によって明国へ「ばはん(海賊)を送り込もうとしていた「明国派兵構想の浮上」問題が検討されている。島津氏の琉球統治政策においては、尚寧王らの不在中に行われた琉球検地が論究されている。

第五章「境界の領域として」では、島津氏への従属を強いられた琉球の服属のプロセスが検討されている。具体的には「掟と起請」として、いわゆる「掟15ヶ条」や島津氏への尚寧王の誓約(起請文)が取り上げられている。そして琉球領から島津氏に割譲された「奄美諸島の直轄化」に関しても詳しく検討を加えている。島津氏の琉球侵攻は、明国に衝撃を与えた。本章は近年の研究成果を要約して、琉球が徳川政権による対明貿易要求(三つの貿易形態)を水面下で働きかけてきたことが明国の警戒心を高め、最終的に琉球は朝貢貿易を10年間停止されたことをまとめる。

「おわりに」では、島津氏の琉球侵攻が、琉明関係を大きく変化させ、「尚氏、島津氏、徳川政権に三者三様の大きな痛手をもたらしたとする。そして、日本のいわゆる「鎖国(海禁)へと移行する外交体制の変化に、琉球は「独自の外交戦略の構築をせまられていく」として1630年以降を見通して攔筆する。

### 3. 本書の成果と若干の問題点

本書の特長は、第一に、上述の点からも明らかなように、政治史を基軸として島津—琉球関係史料を可能な限り博搜し、年次を丹念に追いながら記述している点にある。すなわち、中央政権としての豊臣政権および徳川政権と島津氏・琉球の絡み合いを細大もらさず検証することによって、琉球侵略の全体像を初めて描き出した点にある。

第二に、島津氏の琉球出兵=侵略を幕藩制国家論および東アジアの変動の中に位置づけようとしている点で、著者の前著『幕藩体制形成期の琉球支配』(2001年、吉川弘文館)の延長線上に位置づけられるものであるが、当該期における明国・朝鮮国との関わりを視野に納めることで、島津氏の軍事行動の歴史的意義が広い視野から捉えられるようになっている。

第三に、徳川政権は島津氏の琉球出兵に抑制的であったことが、本書によってはじめて明らかにされた点である。ただし、島津氏の琉球侵攻が「成功」すると、家康と秀忠はただちに島津氏の軍事行動を称揚していたこともあわせて捉える必要がある。

第四に、奄美諸島や琉球での戦闘過程が丹念に追跡されている点にある。このことは、島津氏と琉球間には、どのような交戦が見られたのかを具体的に浮かびあがらせることによって、琉球侵略がいかなる特徴を帯びていたかを明らかにしている。

第五に、史料引用の扱いにおいて、本書は基本的に現代語訳や読み下しを先に示し、原文をその後に置き、さらに史料解説を加えるなど丁寧な叙述方法をとっている。この方法は一般読者に史料読解の便を図るだけでなく、読者自身による検証を可能とする点でも有効である。

以上の他にも本書の特長は見られるが、紙幅の関係から割愛し、評者が気になった問題点を取り上げたい。

第一は、島津氏の琉球侵略に関する研究史の整理が、やや簡略にすぎるように思われる。かつて島津の琉球入り、琉球進入、琉球出兵などの用語によって島津氏の軍事行動の歴史的意義が評価されてきた。それに対して本書は、明確に島津氏の琉球侵略として位置づけているものの、いかなる点で侵略とするのかという点での積極的な定義付けは見られない。

そのことと関連して、第二に、本書が軍事侵略への政治的プロセスを年次を追って細大もらさず盛り込んで叙述しようとしたことが、かえって論点の拡散化を招くこととなったのではないかと思われる。すでに研究史上で指摘されている問題——例えば、琉球出兵をめぐる島津氏権力での積極派と消極派の角逐を論じた紙屋敦之氏の提起と本書での捉え方では、どのような差異があるのか——など不明瞭な点が見られるからである。

本書の「あとがき」において、琉球は豊臣政権の圧力をかわす方策をとることによって、直接的侵略を回避することができたが、一方、徳川政権との関係においては軍事侵攻を回避しえなかったのはなぜか、という問いは新鮮である。しかしながら、関係史料の不足などから、その考察は十分に果たされてはいない。ただ、この新たな論点の提起は残された研究課題としてだけでなく、琉球侵略を検討する上で今後解明すべき重要な論点となることは間違いない。

最後に史料解釈や史実の捉え方において二、三の疑問点を記しておきたい。琉球での戦闘過程において、樺山が七島衆へ琉球百姓の切り捨てを命じた史料において、「彦作はただちにこれを実行し、刀が備前物の名刀ゆえに、切られた12、3人ほどの百姓たちは少しも痛がる様子はないと報告」してきたと解釈している(154頁)。しかし、その原文は「(彦作)、皆引出し切捨申候、私刀者前方被下候備前物二而候、拾二三人程切捨候得共、少しも痛不申与申上候」とある。これは、彦作の刀は以前に下賜された備前物であるため、12、3人を切り捨てても刃こぼれしなかった、と解すべきであろう。琉球百姓の痛みではなく、備前物の刀剣の「痛み」を問題としていたのである。

琉球侵攻の情報を「特に宮古・八重山島には…王府より使者をもって伝えられていたであろうが、云々」(184頁)と推測している。しかし、1609年(月日は不明)に宮古島の叶船(年貢上納船)が沖縄島へ派遣されていた。そのことは「忠導氏家譜」(正統五世玄興)新里与人の項に、「同年(万曆三七年・1609)、貢物の宰領(役)となり中山(沖縄島)に到る、公事全竣して帰島す」(『平良市史』第3巻資料編1 前近代、1981年)とある。この新里与人によって島津軍に制圧された沖縄島の様相が宮古島へもたらされたと見るのが妥当ではなかろうか。以上、やや微細な点での疑義を呈するものとなったが、本書全体の成果を減ずるものではない。

本書によって初めて島津氏による琉球侵略に関する全体的な歴史像が描き出された点を再度、強調しておきたい。本書の成果を踏み台とすることが、後学の者にとっては必須の作業となる。繰り返しかえし読み返される、というよりも読み返すべき価値のある著書と言えよう。

(琉球大学)